

# スマート・プランニング実践の手引き 【第二版】を公表

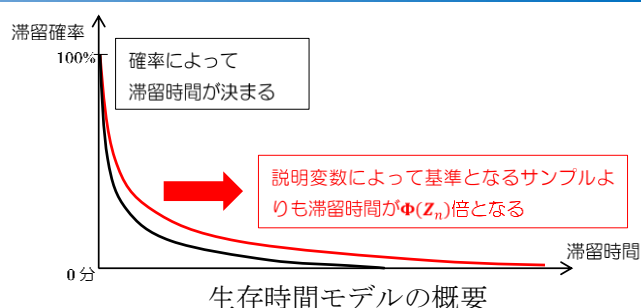
平成30年9月にスマート・プランニング実践の手引き【第二版】が公表となりました。

昨年7月に公表された第1版からモデルの改良、ケーススタディの追加、モデルと用語の解説の追加などを行い、皆様にとってより使いやすい手引きとなりました。今回のスマプラ通信では、主な改訂内容について皆様に詳しくお伝えします。



## 改訂内容①：モデルへの滞留時間の追加

回遊行動シミュレーションモデルは、個人単位での交通行動を予測する手法である離散選択モデル（非集計モデル）を用いることが基本となります。第1版までは回遊継続選択、目的地選択、経路選択の3段階で実施していましたが、第2版では、滞留時間分布モデルを追加しました。本モデルは、生存時間モデルと呼ばれる手法により連続的な時間分布を推計できます。



## 改訂内容②：シミュレーションの妥当性確認の考え方の追加

来訪者数のデータを用いて中心市街地への来訪者数を発生させて、その来訪者数に回遊行動シミュレーションモデルを適用し、中心市街地内での回遊行動シミュレーションを実行します。

回遊行動シミュレーションを用いて施策評価を行う前には、各要素モデル、現況のシミュレーション結果、シミュレーションの施策感度の3つの視点についてチェックし、回遊行動シミュレーションの妥当性を確認することが望ましいです。特に、各要素モデルのチェックは、最低限行うことが必要です。シミュレーション結果が適切に表現されていないと考えられる場合には、回遊行動シミュレーションモデルのモデル構造や説明変数の修正を行い、調整していきます。

## 改訂内容③：中心市街地の魅力向上による来訪者数増加の考え方

施設配置や空間形成を行うことで、地区の魅力が向上し、中心市街地での回遊性向上のみならず、中心市街地への来訪者数自体が増加することが期待されるため、シミュレーションのインプットの来訪者数を変化させることにより、来訪者数の増加が地区の回遊に与える影響をみることが考えられます。来訪者数の増加は、床面積の変化分等から算出することが考えられます。

回遊行動シミュレーションモデルだけでなく、広域的な流動を推計する四段階推定法の分布モデルを構築し中心市街地の魅力を説明変数として加えることで、地区の魅力向上による来訪者数の変化自体を評価することも考えられます。

## 改訂内容④：ケーススタディの追加

H27に実施した岡山市でのケーススタディに、滞留時間分布モデルや再開発実施等の施策の評価事例を追加しています。併せて、H28に岡山市、神戸市で実施したケーススタディも掲載しています。神戸市の事例では、歩道空間拡幅及びパークレット設置のシミュレーションを行っています。



パークレット設置の様子